
手のひらの竜

ひららん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手のひらの竜

【Nコード】

N4460X

【作者名】

ひららん

【あらすじ】

就活中の雪音はふとしたことから知り合った手のひらサイズの竜に異世界に誘われる。ちょっとした好奇心で異世界に渡った雪音だったが、何故か突然現れた王子様をお願い事をされて……。異世界恋愛モノの予定です。それほど激しい描写にはならない予定ですが、保険としてR15をつけました。

都会・1

「竜を待っているの」

——私の一言が、すべての始まりだった。——

その日は就職試験だった。もう何度目になるのかは数えたくもない。相変わらず手応えのない面接を終え、私は空調の利いたオフィスビルから午後の街に吐き出された。たちまち湿った空気が身体を取り囲む。その湿度に、来月には梅雨が来ることを思い出して憂鬱になった。このまま梅雨になっても、ひょっとしたら夏になっても、多分、いや、きっと就活は終わらないだろう、そんな嬉しくもない予想が脳裏を過る。

周囲には一様に黒いスーツに身を包んだ同年代の人が数名。いつものように特に会話もなくただ駅に向かって歩き、いつの間にか雑踏に紛れて互いを見失う。いずれまたどこかの面接会場で出会うこともあるのかもしれないが、いちいち覚えておく気にはならない。少子化だと言われても、今年大学を卒業する人間がいかに大勢いるかを実感する毎日だ。

曇り空の下、のショールウィンドウに映る姿は、白いブラウスに黒いパンツスーツ、黒い靴と黒いバッグに真つ黒な髪。何度見てもどこか見慣れない自分。私は軽く眉をしかめて黒ぶちの眼鏡を外してバッグにしまった。度は入っていないので、外しても視界に変化はない。

気分を切り替えようと私は駅の反対側の出口に回った。この辺りは駅を境にオフィス街と住宅街に別れている。オフィス街側に行つたのは今日が初めてだったが、住宅街側には何度も来たことがあった。

通りに面したチェーンのカフェに足を踏み入れたものの、残念なが

ら屋内の席がいっぱいだったので、カップを持って通りに面した屋外の席に出た。雨が止んだばかりらしく湿っぽい風が吹いている所為か、外の席は人影がまばらだ。軒から張り出したルーフの下の蔭濡れていない椅子に座ると、自然と通りに顔を向けることになる。

たちまち水滴を纏わりつかせたカップから冷たいカフェラテを一口飲んで、喉が渴いていたことに改めて気付いた。面接にはとつくに慣れたつもりだったけれど、それでも緊張していたらしい。

息を吐いて見上げた空では、黒い雲が風に流されていく。上空は風が強いのだろう。刻々と形を変えていく雲は、空を駆けていく竜のようにも見える。

——あの背中に乗って飛んだら気持ちいいだろうな。

そんな思いが過る。

——いいなあ、自由で。

続いて浮かんだ考えに私は首を振った。私だって自由だ。何の束縛もない。一人暮らしで、養わなければいけない人はいないし、将来を約束した相手も居ない。田舎の母は兄と同居しているから、私が帰る必要はない。単に私は私の為に、来年からの仕事を見つけないければならない。ただそれだけのことが、これほど大変だとは。私は溜息を飲み込んでストローに口をつけた。

このまま天気が回復すれば、後から家の近くの河原にジョギングに行けそうだ。少し身体を動かしたらすっきりするだろうか。

「あ、雪音ちゃん？」

下を向いていた視線の先に止まったのは新品の白いスニーカーだった。その上は細身な七分丈のジーンズに、シャープなラインのシヤツ。柔らかく巻いた茶色い髪が風に揺れる。

「佳織？」

よく知っている友人の名前の語尾を思わず上げてしまったのは、佳織の意外な服装に驚いたから。私の知っている佳織はいつも可愛

らしい雰囲気ふんいきの服を着ていたし、何よりも艶々した黒い真直ぐな髪をしていたから。黒目がちな目をした佳織にあの髪はとても似合っていて、まるで日本人形にっぽんがたのようだと思っていたのに。

「雪音ちゃん、元気？」

可愛らしく小首を傾げて佳織が訊く。こういう仕草は以前のままだ。

「うん、まあ元気。就活中だから凹くぼんでるけど」

「そっか、大変そうだね」

「うん。今日は駅えきのあっち側で面接だった」

「お疲れ様」

ここで結果だの手応えだのを聞かないのは佳織の思い遣りだろう。

「髪、染めたんだね」

佳織は特に急いでいる様子もないから、目に着いたことを口にする。

「うん。雪音ちゃんと反対だね」

そう、私の髪は就活のために黒く染めた。それは今日の前にいる佳織が早々と内定をもらえたことと無関係ではないのだが、いまだに私はこの色に慣れない。

「私は就活だから仕方ないけど。佳織はせっかく綺麗な黒だったのに、勿体ないよ」

「似合わない？」

「そんなことないけどさ」

困った顔をして黙っている佳織に、私は仕方なく尋ねた。本来私が気にすることではないのだけれど。

「明良あきらとはうまくいってる？」

「うん。これからレポートの打ち合わせで明良の家に行くところ」

佳織はこくりと頷いた。

明良は私と佳織の同じ大学のゼミ仲間仲間で、この先の住宅街に住んでいる。私がこの駅に何度も来たことがあるのは、私が明良と付き合っていたからだ。その明良と佳織は現在つきあっている。つまり

佳織は私のモトカレのイマカノだ。

といっても、私が明良と知り合う前から佳織は私の数少ない友人の一人だったし、明良と私が別れたのはほとんど私の我儘だったから、その後で佳織が明良とつきあうことには何の問題もない。ないはずなのに、佳織は私に氣を使って、こうして明良の名前を言う時に少し困った顔をする。氣にしないでいいのに。

「そっか。頑張ってるね。私はレポート書いてる暇ないから、ゼミの単位は落とすかも」

私があっさりと言っても、佳織は何か言いたげな顔のまま黙っている。その控えめな意思表示の様子が可愛いのは確かだが、その可愛さはむしろ明良に見せるべきだと思う。

「明良に聞かれたら、私は元気でそれなりにやってるからって伝えてくれる？ 多分もう私のことなんか興味ないとは思うけど」

「そんなこと……」

小さな声で抗議するように佳織が呟く。まったく明良も何をやってるんだか。

「ね、待ち合わせじゃないの？」

「うん」

「もう行ったほうがいいんじゃない？」

「うん……」

しばらくためらっていた佳織は意を決したように顔を上げた。

「雪音ちゃんは待ち合わせ？」

「う……ん、まあね」

否定しなかったのは、私から明良を取ったと佳織が思い込んでいたから。確かに私は佳織が明良のことが好きなことに気づいていたけれど、別れたのはそれが原因ではない。むしろ佳織はいい子だし、明良はいい奴だから、二人がつきあってくれればいいと思っていた。だから現状は歓迎しているのに、佳織だけが納得していない。

「彼氏？」

曖昧に答えた私に佳織は食い下がる。元々待ち合わせなんかして

いないし、明良と別れて以来彼氏と呼べそうな存在はいない。

「まあ、そんなところ。まだ知り合ったばかりだから、彼氏とは言い切れないけど」

嘘を吐くのは好きじゃないけど、これは必要な嘘だ。

「何て名前の人？」

「いいじゃない、まだちゃんと彼氏じゃないんだし」

正直名前なんて考えていない。

「でも」

疑っている顔つきの佳織から視線を逸らして空を見上げる。さっきの竜の形の雲はだいぶん遠くに進んでいたが、まだ形は崩れていない。

「リュウ、そう、私は竜を待っているの」

出まかせに思いついた言葉を名前風に発音した私の言葉は、不思議な音色で遠くまで響いた気がした。

「リュウさんかぁ。どんな人？」

次の質問に内心で悲鳴を上げる。そんなこと、急に思いつくわけがない。

「えっと、その……」

「私、一緒に待ってていいかな」

「えっと、まだ時間掛かるから。面接が予想より早く終わっちゃって……」

私はしどろもどろに答えた。当たり前だがこのままいくら待っても誰も来るわけがない。

「そっかぁ」

「それより、明良、待ってるんじゃない？ あいつ結構時間には煩いよ」

おたおたしている私を見て、佳織がくすりと笑った。

「照れてる雪音ちゃん、可愛い」

完全に誤解だ。私は照れてるんじゃないじゃなくて焦ってるだけだし、そもそも何をしてても可愛いと言われるタイプではない。可愛いのは佳

織だ。

「今日はもう行くね。リュウさんに会わせてもらうの、今度にしく」

折角の誤解を解くわけにもいかずに余計に焦る私の前で佳織は笑顔で言った。

「う、うん。明良によろしく」

小さく手を振って佳織を見送る。華奢な後姿が雑踏にまぎれて見えなくなったところで、私は大きく息を吐いた。どっと疲れた気がする。

椅子の席に身体を預けて、すっかり水っぽくなったカフェラテを飲み干した時、すぐ近くで声がした。

「待たせたな。俺に何の用だ？」

都会・2

私は最初、その声が自分に向けられたものだとは思わなかった。だって誰かを待っていたわけじゃない。

でも、その声は少々苛立ったように繰り返された。

「おい、俺に用じゃないのかよ」

あくまでも他人事として声の主に向けた視線の先にいたのは、暗緑色のトカゲだった。カフェの丸いテーブルの上で、私のてのひら程の大きさの細身のトカゲが、後ろ脚だけで立ち上がってこちらを見上げている。

「あら、綺麗なトカゲ」

爬虫類が嫌いな女の子は多いが、私は田舎育ちだから平気だ。とあって好きなわけでもないが、目の前のトカゲはとても綺麗で不快感は全くなかった。

「失礼な、どこがトカゲなんだ」

トカゲはぐいっと胸を反らせて言った。

「え、トカゲが喋った？」

まさかと思いつつぽろりと出てしまった言葉に、予想外の反応があった。

「だから、トカゲじゃねえっての」

トカゲが——トカゲじゃないと言われてもトカゲにしか見えない——ぽんと飛びあがって叫んだ。とはいえ身体が小さいから大した声量ではない。

「トカゲじゃなければ何？」

トカゲと会話している事実がうまく飲み込めないまま、それでも会話の流れのままに尋ねると、トカゲは小さい胸を偉そうに反らせた。

「俺は竜だ」

「竜？」

「そう、竜だよ。見ればわかるだろう」

言葉とともに振られた身体の両脇のぴらぴらしたものは、確かに薄い翼に見える。身体の大きさからするとこれで飛べるとは思えないけど。

「竜って、こんなにちっちゃいのか」

現実感がないままに思ったことを呟くと、手のひらサイズの竜は怒ったようにぽんと跳び上がり、その場で見事な後ろ宙返りを見せた。いわゆるバク宙だ。長い尻尾が鮮やかな弧を描いて回った。

軽やかに着地を決めた竜は、それで気分が変わったらしい。正面から怒る代わりにやりと笑って見せた――らしい。何しろ見慣れていないから表情がよくわからないのだが。

とはいえ、その顔は確かにトカゲというには少々彫りが深く、髭らしきものも生えている。さらに、良く見れば頭にはささやかながら角らしき出っ張りがあり、その後ろにはタテガミなのか、毛のようなものも生えている。確かトカゲにはこういうものはなかったはずだ。つまりは、サイズを無視するなら竜と言われればそう思えなくもない、といったところだ。無視するには大きすぎる違いだけれど。にやりと笑ったらしい竜は、ぐいと頭を反らせて胸を張った。鱗に覆われた身体が綺麗にしなる。

「俺も女の子ってのはおやつにちょうどいいくらいの可愛らしいモノと思ってたぜ」

「なっ」

絶句した私にトカゲ改め竜は重ねて尋ねる。

「で、俺に何の用だ？」

「用？」

竜に用なんてない。実在するとは思っていなかったんだもの、用事なんてあるわけがない。

「だって俺のことを呼んだじゃないか」

「あっ」

言われてやっと思ひ出した。さっき竜を待ってるって言ったのは

私だ。

「やっと思い出したか。で、何の用だ？」

「ご、ごめんなさい。本当に来るなんて思ってたから……」
申し訳なくて小さくなった私に、竜は器用に肩をすくめて見せた。
多分呆れたんだろうと思ったけれど、竜が何か言う前に、私の前で小さくひとつ息を飲む音がした。

視線を上げると、今にも悲鳴を上げそうな顔で女の人が大きく飛び退くところだった。

意外すぎる竜の登場で忘れていたが、ここは通りに面したカフェだ。テーブルの上のトカゲ——もしくは竜——は、違和感がありすぎる。道行く人の中には、爬虫類が嫌いな人もきつというはずだ。さっきの女の人はそのままこちらを見ようともせずに逃げるように小走りに去っていく。

「ちょ、ちよつと、場所を変えよう」

私は立ちあがって鞆を肩に掛け、空いているほうの手を竜に差し出した。こちらの意図が伝わったと見えて、竜は身軽に私の腕を駆け上がって肩に乗った。硬い感触が手に残ったけれど、特に重くはない。

私は駅とは反対方向にある小さな公園に向かった。あそこなら植え込みがあるから竜も目立たないはずだ。つくづく土地勘のある場所であった。

「この世界は随分人工物が多いんだな」

耳元で竜の声がした。声だけ聞けば同年代の人と話しているのとは変わらない。口調から、多分この竜はオスだろうな、と思う。竜に性別があるのかどうかは知らないけれど。

「この辺は都会だから。私の生まれ育ったところはもっと自然に囲まれてるんだけどね」

水溜まりを避けて歩きながら答える。これが大きな竜だと畏まらなくてはいけない気がしそうだが、この竜はとても気安い雰囲気だ。私は敬語も使わずに話すことにした。

「ふうん。いろいろあるってことか」

感心したように竜が呟いたところで、目的の公園に着いた。幸い人影はない。雨が止んだばかりだからだろう。

ベンチは濡れていたので隅の鉄棒に寄りかかると、竜はすぐ脇の植え込みの葉っぱの上にひらりと移動した。なるほど、確かに飛べるらしい。トカゲとは違うってことか。

私は竜に向き合うととりあえず謝罪した。

「ごめんなさい、別に用事があったわけじゃないんです」

小さくても伝説上の存在だ。怒らせたら大変なことになるんじゃないだろうか。

「ま、いいってことよ」

意外にも竜は気さくに言い、更には勿体ないような申し出までしてくれた。

「折角来たんだ、何か用事ないか？」

気持ちはあるがたいが、そう言われても用事なんか思いつかない。

「急に言われても……」

「別に思いつきでもいいぜ」

竜は久しぶりに会ったクラスメイトのような口調で言う。

「願いを叶える代わりに魂を、とか言わないよね？」

念のため訊いてみると、竜は苦笑しながら首を振った。

「魂って貰えるものなのか？」

「さ、さあ……」

「とにかく礼はいらないぜ。気軽に何でも言ってみな」

促されて、たった一つ思いついたことを口にする。多分無理だろうけど、他に思いつかないし。

「うーん……。さっき竜の背中に乗って飛んでみたいって思ったんだけど……」

「悪かったな、小さくて」

案の定気安く言ってしまった私の言葉は竜のプライドを傷つけたらしいが、この大きさの違いはどうにもならない。ぽんと跳び上が

りくると宙返りをした竜は、今度はぽつと火まで噴いた。トカゲ型のライターみたいだ。さすが竜。

どうやらこの宙返りは竜の気分の切り替えになっているらしい。

「ねえ、竜さんはどこから来たの？」

思いついて尋ねてみる。

「あっちの世界だ」

「あっち？」

「ま、方向はないようなもんだが。あっち側って感じかな」

説明にはなっていないが、要するに別の世界ってことだろう。竜自体がファンタジー系の存在だから不思議ではない、というか、竜と会話している時点で十分不思議なんだから、むしろ意外感は少ない。

「あっち側ってどんなところ？」

竜の世界なら中国の仙人がいそうなところだろうか。それとも西洋の中世？　そういえば中国の竜と西洋のドラゴンは違うはずだけど、目の前の竜はどっちなんだろう？　ええと、翼があるから西洋系？　でも顔は中国系？　私には二つの違いはよくわからないし、そもそも架空の存在に判別基準があるかどうかも怪しい。

考えて込んでいる私に、竜は予想外の提案をした。

「行ってみるか？」

「え？」

「気になるなら連れてってやるぜ。入口の前には海しかなかったけどな」

「入口？　海？」

「ああ。小島の海に面した所に入口があったんだ。たまたまその前を通りかかったら、あんたの声が聞こえたから、見に来てみた。大した手間じゃないから心配しなくていい」

要するに私にあちら側を見せてくれようというらしい。この竜、意味なく呼び出したというのに、怒らないばかりか随分親切だ。

「えっと、帰れなくなったりしないよね？」

一応警戒して訊いてみる。

「短い時間で、入口から離れなければ大丈夫だろう。その代わり海しか見られないけどな」

「海、か」

言われた途端に海が見たくなった。この都会では海が見えない。

故郷では家から少し行けばもう遠くに海が見えていたのに。

「あっちは天気はいいの？」

「ああ。からっと晴れてたぜ」

それはなかなか羨ましいと思った。この湿っぽい天気は不快だ。

「じゃあ、ちょっとだけ、ね。竜さん、お願いします」

簡単に決意をして頭を下げる。

「その竜さんっての、なんとかしないか？」

返事の代わりに竜が提案した。

「あ、そうか。竜さん、名前はあるの？」

「ハーンって呼んでくれ」

「ハーン？」

「ああ、ハーンだ」

呼び易い短い名前でもよかった。

「私は後藤雪音」

さらりと名乗った音は、ハーンには発音しにくかったらしく、ころうじて語尾だけが繰り返された。

「……キネ？」

「うん、それでいいや。キネって呼んで」

私は自分の名前があまり好きではない。「後」とか「雪」とかってイメージが暗いし、名字に濁音が入っているのもイマイチな感じだ。しかも「雪音」ってのは楚々として大人しげで綺麗な上に抽象的すぎて、私に似合わない気がする。だからハーンの発した硬質な音に心が惹かれた。

「じゃあ行くぞ、キーネ」

言いながらハーンが飛び上がり、私の肩にそっと足を掛ける。次

の瞬間、私の周囲は乳白色の光に包まれた。

海辺・1

光が消えると目の前には綺麗な青い色が広がっていた。しばらくぼんやりとその色を眺めてから、やっとそれがよく晴れた空と風いだ海であることを認識した。

ざーん、ざーんと穏やかな波の音が優しく鼓膜を揺らし、潮の香りが鼻腔をくすぐる。確かにこれは海だ。

もう見回すと、私は海辺に面した岩場に立っているらしいことがわかった。私の足元から少し先には観光地のポスターにありそうな白い砂浜を挟んで海が広がっている。左右を見回しても人工物は一切見えない。当然ゴミなど落ちていない、感動的に美しい海辺の光景。しばらく見惚れた後、やっと私は同行者の存在を思い出した。こんなに素晴らしい風景を見せてくれたんだもの、いっぱいお礼を言わねば。

「ハーヌ、すごく綺麗だね」

言いながら肩を見降ろしたが、期待した姿はそこにはなかった。

「あれ？ ハーヌ？」

足元の地面を見まわしたが、トカゲの姿は見つからない。茶色い岩場に深緑のトカゲはそれほど溶け込むとは思えないけれど、隙間に入ってしまったのだろうか。でもハーヌがわざわざ隠れる必要はないはずなのに。

もっと遠くに行ってしまったのかと改めて見回すと、私の左後方が暗緑色の岩になっているのがわかった。この色だとハーヌと同じだから、見つけるのは困難だ。でも何でハーヌは隠れているんだろう。タチの悪い冗談だろうか。

少々腹を立てながら岩に目を凝らした私の前で、突然その岩が動いた。

「えっ」

思わず瞬きしたけれど、確かに見間違いはない。岩は動いてい

る。これだけの大岩が崩れたら私なんかぺちゃんこだ。

恐怖から数歩後ずさり、離れた所から改めて見上げて、やっと私はその岩が竜の形をしていることに気付いた。――私の前にあるのが前足、その後ろに翼、上には首がそびえていて――私の見えている前で首がきよろきよろと振られた。動きにつれて繊細な縞を描いている鱗が微かに光を反射する。

この形、この色、大きさはとんでもなく違うけれど、これはきつとハーヌだ。この大きさなら間違いなく竜に見える。

「ハーヌ!!!」

必死に上を向いて呼びかけたが、ハーヌは気がつかない。手を大きく振りながら息が切れるほど何度も呼んだのに、ハーヌは上のほうを向いて周囲を見回すばかりだ。

――ちよつとは下を向いてくれればいいのに。

八つ当たり気味に思っ、気がついた。ハーヌは自分よりもずっと大きい「キーネ」を探しているんだ。だから上ばかり見ている、当然下なんか向くわけがない。

と、同時にあることに思い当ってぞっとした。このままハーヌが「キーネ」を探しに飛び立ってしまったら、帰る方法も判らないまま私はここに置き去りだ。大きな「キーネ」を探しているハーヌが私を見つけることは絶対にない。何とか今ここでこちらを向かせなくては。

焦りながら見回すとハーヌのすぐ向こうに本物の岩がそびえているのが見えた。あそこから背中に飛び移れば、いくらハーヌでも気がつくんじゃないだろうか。うまい具合にハーヌ背中の少し上に、こちらに向かって張り出した大岩がある。あそこまではなんとか辿りつけそうだ。

私はまず肩に掛けたままだったバッグを一度降ろして、ベルトを外した。このバッグはベルトのフックを掛け替えるとリュック型になるのだ。岩を登るのなら両手が使えたほうがいい。しっかりファスナーを閉めて、背中に背負いなおした。

上着はちよつと迷ったけれどそのまま着ていることにした。万一滑り落ちることがあれば、服は厚いほうがガードになる。幸いパンツスーツにローヒールだから、動きは比較的楽だ。もっと大人しい印象の服のほうが就活向きかもと迷ったが、服に似合った動きができる自信がなかったので活動的なものをチョイスしたのが功を奏したことになる。――まったく予想はしていなかったけれど。

登り始めてみると、茶色い岩はごつごつとして手掛かりや足場が多く、ありがたいことに予想よりも登り易かった。あちこちに黒い鳥の羽や羽毛が落ちているから、近くに巣があるのかもしれない。糞まで落ちているのは嬉しくないが、贅沢を言っている余裕はない。

最初はハーヌが飛び立ってしまわないかとちらちら後ろを窺いながら登っていたけれど、一度足を踏み外しそうになってからは気を引き締めて目の前の岩に集中することにした。ここで落ちることは最悪の結果に繋がっている。

目標にしていた岩に手を掛け、身体を引き上げる。これくらいで息が切れているのは運動不足の証拠だろう。いくら就活中とはいえ、ちよつと情けない。

上から見下ろすと、ハーヌの背中は一メートルくらい下になっていた。背中は大いけれど、うまく真ん中に乗らないと鱗で滑って下まで落ちてしまいそうだ。慎重に狙いを定めて――と思った途端、ハーヌが足踏みをした。顔が真直ぐに上げられる。まさか飛び立つ気じゃ――。

焦った私は大声を上げながら深緑の背中目掛けて飛び降りた。

「ハーヌ!!!!」

私の無謀な試みは、確かにハーヌをこちらに向かせることに成功した。長い首の上の頭がくるとこちらを向き、怪訝そうな声が降ってくる。

「キーネ？」

続いて鼓膜が破れるような大音声が轟いた。

「キーネ!!!!」

次の瞬間、私の足元が大きく跳ね上がり、私の身体は空中に投げ出された。耳元で風が鳴る。本当に怖いと悲鳴は出ないものらしい。弧を描いて青空を切り裂くハーヌの尻尾がスローモーションで目に映る。

――びっくりしたハーヌは、きっとバク宙をしたに違いない。それがハーヌの癖のようだった。今更思い出しても遅い。そろそろ岩に叩きつけられる頃だろうか。きっと大怪我だろう。骨折くらいで済めばいいが、と思った時、急に身体が止まった。加わる重力に口から内臓が飛び出しそうだった。

「ぐ、ぐえっ。げほっ」

品のない音が口から出たが、幸い音だけで済んだようだ。

私の胴を掴んでいたハーヌの鉤爪がゆっくりと動き、慎重に私の足を地面に置いてくれると、そのまま私は岩にすがって激しく咳き込んだ。

「大丈夫か、キーネ」

「あう、た、多分……」

なんとか答えて大きく深呼吸をし、身体を真直ぐにする。少しずつくらくらするのを目を瞑ってやり過ごす。ややあって目を開けると、ハーヌの大きな顔が心配そうにこちらを見ていた。

「ごめんな」

しゅんとした表情で紡がれた謝罪の言葉に、首を横に振って見せる。確かに私を跳ね飛ばしたのはハーヌだけれど、助けてくれたのもハーヌだし、原因は私にある。

「ううん、私も悪かったから。助けてくれてありがとう」

「本当に大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

眩暈も治まったし、今度は自信を持って答えられた。

「それにしても、ハーヌってこんなに大きかったんだね」

改めて見上げるとハーヌも頷いた。

「界を渡ると大きさが変わることがあるとは聞いていたが、こういうことだったは知らなかったぜ」

今のハーヌは身体だけで大型のトラックくらいある。頭だけでも私と同じくらいの高さだ。うん、よく絵で見る竜そのものといった感じ。

しみじみ見上げていると、ハーヌが思い出したように言った。

「そう言えば、さっき何か光るものがあっちのほうに飛んで行ったが、心当たりはないか？」

「光るもの？」

「ああ」

光ると言われても、ペンダントはちゃんとあるし、他にアクセサリーは着けていない。リュックのファスナーも閉まったままだ。ポケットは——と手を当てたところでぎくりとした。スーツのポケットがぺたんこだ。携帯を入れてあったはずなのに。

慌てて手を突っ込むが、中は空だった。反対のポケット、ズボンのポケット、胸のポケットからリュックの中まで確認したけれど、やはり携帯は見つからなかった。

「大事なもののなか？」

「うん。あれがないとかなり困る。探さなきゃ」

携帯がないと、まず就活に困る。その他の連絡先も全部携帯の中だ。もし壊れていてもメモリーさえ吸えればなんとかなるはず……。

「多分あっちだったと思う」

ハーヌが指したのは岩場の先だった。私の携帯はかなり目立つから、きつとすぐ見つかるはずだ。壊れていないといいけど。

「あ」

岩場に向かって踏み出した私の視線の先には、王子様が立っていた。

海辺・2

もちろん「王子」なんて名札が下がっているわけではないけれど、目の前に立っていた人は絵に描いた王子様そのものだった。

軽くカールする明るい金髪に青い目、白い肌。鼻筋の通った美しい顔は西洋人っぽい細面ながら頬の柔らかい曲線が優しい雰囲気、育ちの良さを感じさせる。肩にはね上げた短めのマントの下から覗く体軀は、決して太っているわけではないが骨格そのものが大きい上に適度に筋肉が乗っている結果、典型的な日本人よりかなり大柄な印象だ。ゆったりしたズボンと革のブーツに覆われた長い脚。腰には宝石で飾られた剣が下げられている。非の打ちどころのない姿に唯一そぐわないのが――

「あーっ、私の携帯!!」

そう、王子様の手には、安っぽく煌めくデコシールの貼られた私の携帯電話が握られていた。

言い訳をするならば、携帯にデコシールを貼るのは決して私の趣味ではない。

着る物、持ち物やインテリアに至るまで、よく言えば実用的、悪く言うなら可愛げがないと表現されるタイプのデザインが私の好みだ。別に可愛いものが嫌いなわけではないが、平均よりも高めの背とがっちりした肩幅といった遺伝子的な部分から、私には可愛いものが似合わないのだ。だから可愛いものが近くにあると、その似合わないさが気恥ずかしくて、落ち着かなくなる。

当然きらきらしいピンクとシルバーの痛い雰囲気携帯電話は私の趣味ではない。何の面白味もない黒の携帯電話にデコシールを貼ったのは私の姪っ子だった。

私と兄は一回り以上年齢が離れている。はつきり言われたこともないし、わざわざ問い質すような事柄でもないが、父と母の年齢からすれば兄が普通で、私は想定外にできてしまったところだろう。

その兄は、昨年父の三回忌を昨年済ませると、一人暮らしの母が住んでいた家を建て替えて同居を始めた。父を亡くして心細いことを隠そうとしなかった母は家族と暮らせるのを喜んだ。

私にしても、産んでくれたことに感謝を惜しむつもりはないが、やっと兄が手を離れたところにもう一度育児をしなければならなかった母は、結果的に私をほとんど自分の母親に預けきりにしたので、正直に言えば今更母と二人暮らしをするのは気づまりだったから、兄の決断は大歓迎だった。

それでも帰る家がなくなるわけではないと言って、兄は新居にも私の部屋を作ってくれた。きっと数年のうちに姪っ子が使うことになるのはわかってはいるけれど、それでも気遣いはありがたい。逆にいえば、そんな気遣いをしなくてはならない程私と兄の関係は他人行儀だ。年齢が離れすぎてほとんど親しく接する機会がないまま今まで来てしまった。

昨年の暮れに初めて訪れた兄の家は、まだ新築の匂いがしていた。それでもその家は既に義姉の切り盛りする空間となっていて、勝手のわからない私はただ客として自分に与えられた部屋でぼんやりと時間を潰すことしかできずにいた。

そこにひょっこり顔を覗かせたのが姪っ子だった。多分新居で初めて迎える年越しの準備に忙しい両親から私に遊んでもらえと言われたのだろう。

やってきたのはいいが、姪っ子は入り口に立ったまま困った顔を

してもじもししていた。子供に慣れていない私は小学生にもなっていない姪っ子にどう話しかけていいかわからなかったし、あちらもあちらで、数えるほどしか顔を合わせたことのない叔母に何を言っただけなのか思いつかなかったのだろう。

それでも、先に口を開いたのは姪っ子だった。

ベッドに座って意味もなく携帯電話を弄っていた私の手元を見て、彼女は言ったのだ。

「それ、綺麗ね」

彼女の視線の先で揺れていたのは、銀色の熊のストラップだった。

「これ？ この熊？」

「うん、そう。可愛いし、綺麗」

私の隣に座った姪っ子は、そっと手を伸ばしてストラップに触れた。

「じゃあ、あげようか？」

このストラップは何かの景品で、大きさが手頃だったから使っただけだった。可愛いと言えば可愛いが、私にはむしろ安っぽいメッキがすぐ剥げるだろうという予測が先に目に着くシロモノだ。

たまたまそれまで気に入って使っていたストラップのコードが擦り切れてしまったので、気に入ったのが見つかるまでの繋ぎのつもりで使っていたから、私には特に思い入れがなかった。

「え、いいの？」

「うん。あげる。携帯は持っていないなくても、鞄につけてもいいんじゃないかな？」

「わあ、ありがとう」

気軽に言った私とは裏腹に、姪っ子は外したストラップに頬擦りをして喜んだ上、それだけでは悪いと自分の宝物の入った箱を持ち出してきた。

「どれでもいいから、つけてあげる」

金色のリボンやピンクのチェーンといったきらきらしたもので溢れた宝箱の中から、大切そうにデコシールの袋を取りだした姪っ子

は、一生懸命な様子で言った。きっとそういった華やかな小物に心惹かれる年頃なのだろう。

正直私はそんな子供騙しに魅力は感じなかったが、彼女の真面目な様子を前にして無碍に断るほど冷たい大人ではない。

「ありがとう」

「どれがいい？」

そう訊かれて困った私は、すべてを彼女に任せることにした。

「どうしたらいいかわからないから、好きに飾ってくれる？」

結果として出来上がったのが、無駄にきらきらしい今の携帯だ。

頼んだ時は、帰ったらすぐに剥がせばいいと思っていたのだが、あまりにも熱心に貼ってくれた様子から、痛いと思いつつもそのままにしていた。

幼児の仕事にしては随分ときっちり貼ってあったし、何よりも使ってみたら黒い鞆の中で派手派手しい携帯は探しやすいという思わぬ利点を見つけたという事情もある。

その携帯が、今は異世界の王子様の手に握られている。これほど違和感のある光景も珍しい、と私はどこか感心して見ていた。

「こちらはマレビトさまのご宝物でございましょうか？」

王子様の口から出た言葉は日本語だったけれど、聞き慣れない単語ばかりだった上に、見るからに横文字を喋りそうな王子様から発せられたので、私は意味を取り損ねてしまった。

「マレビトさま？」

かろうじて耳に残った単語を繰り返す。音としては日本語なんだけれど、意味がわからない。

「マレビトさまでいらっしゃいますよね？」

確認するように王子様が問う。だからマレビトって何？

「ごめん、私、マレビトが何だかわからない。でもその携帯は私のだから。拾ってくれてありがとう」

とりあえずわからない部分はスルーして、手を伸ばした。

「やはりそうでございますか」

素直に渡してくれたものの、王子様は残念そうだ。手を離れた後も未練がましく携帯を見つめている。

視線を感じながらも私はとりあえず携帯を動かした。よかった、とりあえず動く。勿論通信はできないけれど、メモリーは無事らしい。

ほっとしてハースを振り返る。

「壊れてなかった」

「よかったな」

ハースが頷いた。――私だったら携帯電話より竜のほうがずっと気になるはすだけど、この世界だと竜は珍しくないのかな。

疑問はそのままにもう一度王子様にお礼を言う。

「ありがとう。ちょうど探していたところだったの」

「それはようございました。お役に立てて光栄でございます」

王子様の物言いはやたら堅苦しい。ちょっと困って軽い感じで自己紹介してみた。

「私は後藤雪音、キーネって呼んでね」

「私はアンティデュール国の皇太子、ユーノリディアス――」

名乗られた名前は長すぎて聞き取れなかった。それにしても、本物の王子様だったんだ。びっくり。なんでこんな誰もいないところに王子様が一人でいるんだろう？ 普通は護衛とかお付きの人とか、いろいろ居るんじゃないんだろうか。

「――ユーノとお呼びください」

ぼんやりと考えている横で名乗りを続けていた王子様は、簡単な呼び名で締めくくった。助かった、これなら覚えられる。

ほっとした私は、次のユーノの言葉にぼかんと口を開けた。

「キーネさま、どうか私にマレビトのお力をお貸しください」

——どうやらマレビトが私を指しているのは間違いないようだ。

でも、本物の王子様に 私に貸せる力があるとは思えないんだけど。

海辺・3（前書き）

トリカラダマ
鳥烏島と、似たような漢字が多くて紛らわしいかもしれません。ごめんなさい。

11／6

鳥を鴉に改めました。少しは読み易くなっているいいのですが。

海辺・3

「ええと、まずマレビトってのがわからないんだけど」

力を貸すとか貸さないとかって言われても、そもそも私に特殊能力はない。異世界に来たからって能力的な変化がないことは、先ほど岩を登るので苦労したことを考えればほぼ間違いないだろう。変な期待をされても困る。

「マレビトというのは、異界からいらした方のことです」

ユーノの言葉は簡潔だけれど、説明された気がしない。

「どうして私が異界から来たってわかるの？」

「異界からいらした方は黒い髪をなさっていると聞いています。キ―ネさまは見事な黒髪をお持ちですから」

「ふうん」

——あっちの世界にだって金色とか茶色とか、いろいろな色の髪があるんだけどな。

反射的に浮かんだ考えはとりあえず言わずに、肝心の部分を尋ねる。

「私は確かに異界から来たけれど、何か特別な力があるわけじゃないから、力になれるとは思えないけど？」

「マレビトさまは稀なる知識を持っているのでマレビトと呼ばれています。しかもキ―ネさまは竜を従えているような方ですから、きっと私の悩みなど即座に解決していただけると存じます」

なんかこの王子様、激しく誤解してないか？

「この竜は、——ハ―ヌっていうんだけど——ハ―ヌは私が従えているわけじゃないわ。どっちかっていうと、私がオマケの立場よ」

ハ―ヌは私がいなくても困らないけれど、私はハ―ヌがいないと帰れない。どう考えても私が従ってる側だ。——胸を張って言うことでもないけど。

「失礼いたしました」

私の不快感が伝わったのか困ったようにユーノが謝ったところで、黙って私たちの遣り取りを聞いていたハーヌが口を開いた。

「どっちが従うって関係じゃないんだが、とりあえずその頼みを言ってみたらどうだ？」

確かに、そのほうが建設的だ。

私の視線に促されて、ユーノは再び口を開いた。

「私がこの島に参りましたのは、わが国の宝を探すためでございます」

「宝？　こんな海岸に？」

「はい。普段は王宮の宝物殿に納められているのですが、先日、近々行われる私の成人の儀の準備で広間に出したところを、窓から侵入した渡り鴉フタリガラスに持ち去られてしまったのです」

——それは結構マヌケな話なんじゃないだろうか。それにしても、これから成人式ってことは、きっとユーノは私よりも年下だろう。西洋人の年齢って見た目からだとはよくわからないと、改めて思う。まあ常に実年齢より上に見られる私に言われたくないだろうけど。

私の感慨を余所に、ユーノは語り続ける。

「何しろ一番の国宝ですから、儀式までには何としても探し出さねばなりません。見つからない場合は私の王位継承問題にも発展しかねないので、このことは公にはせず、私自身で隠密裏に見つけ出すようにというのが、王の命令でございます」

——あらま、王位継承とか、すごい大問題じゃないの。

「まずは鳥に詳しい者に聞いたところ、鴉が巢に持ち帰っているのではないかとの見解でした。そして、この島の隣にある小島が渡り鴉の営巣地になっているそうなので、それを探しに参りました」

そう言えばこの島にも随分黒い羽根が落ちていたっけ。隣の島に巢があるなら、ここにも立ち寄っているんだろう。

「隣の島なら直接行けばいいんじゃない？」

私の素朴な意見にユーノは溜息を吐いた。

「渡り鴉は非常に凶暴なので、直接近づくのは大変危険です。幸い鳥ですから夜中は寝静まっていますので、この島で夜更けまで待って小舟で近づく予定でおりました」

「夜中に探し物なんてできるの？」

またしてもユーノの溜息。

「問題はそこなんです。探しているのは国宝なので、多少は光るらしいのですが、それでも見つかるかどうか……。それにも増して、渡り鴉は非常に攻撃的で危険な鳥ですから、たとえ夜中でも巢に踏み込んで無事とは思えません。みすみす臣下を危険に晒すのは避けたいのですが、他に手段がなく……」

「そうだったんだ」

携帯は光源になるけれど、その程度で解決できるとは思えない。

「臣下たちは今あちらの浜で準備をしておりますが、私は一足先にその島の様子を遠目でも見ておこうと思い、海岸伝いに歩いているところでした。そこにハーヌさまとご一緒のキーネさまのお姿が見えたので、これは神が我が国に遣わされた救いだと思ったのですが……」

——頼むからそんなご大層なものにしないでくれ。

私の嘆きを感じたわけではないだろうが、ハーヌは海のほうに視線を向けながら尋ねた。

「その小島ってのはどの辺りなんだ？」

「その先を回ったところからはもう見えるはずですよ。渡り鴉は警戒心が強いのであちらから見えると襲われる恐れがあるので、私共の船は反対側の入江に泊めてありますが、今は昼間ですし、こちらから少人数で見るくらいなら大丈夫らしいですよ」

言いながら方向を示して歩き始めたユーノの後について、波打ち際を歩く。靴越しても濡れた砂の感触が心地よい。

「昼間のほうが安全なの？」

だったらわざわざ夜に行かなくても、と思って訊いてみる。

「あくまでも遠目で見るなら、だそうです。この近くの漁師の話では、渡り鴉たちは日中は島から離れて魚を取っていることが多いのですが、島に侵入したのが見つかるに戻ってくるらしいです」

先ほど私がよじ登った大岩から続く岬を回り込むと、確かに小さな島が見えた。海からいきなり垂直に切り立った崖の上が平らになっていて、わずかに木が生えているのが見える。確かにあの上にいるときに鳥に襲われたら、崖から海に飛び込むしかない。海面から岩が覗いている様子を見れば、それがどんなに危険なことか尋ねなくてもよくわかった。

とはいえ、あの崖を暗い中で登るのも同じくらい危険だろう。さつき岩を登ったときだって、しっかり見えていても結構大変だった。「確かに鴉はいないようだな」

ハーマンが言った。私には島の形しかわからない。

「見えるの？」

「ああ。近くの海上にもいないみたいだな」

瞳孔が縦の線になった目でハーマンは島の周辺を見ている。きっと私よりずっと遠くが見えるのだろう。

「俺は渡り鴉の営巣地は何度か見たことがあるが、いくら日中でも少なすぎる気がするぞ。他にもっと大きな巣があるんじゃないか？」

ハーマンの問いに、ユーノが答える。

「既に渡りの季節が始まっていて、群れの大部分は北に向けて既に飛び立った後だそうです。今残っているのは最後の一部分だとか」

——なるほど、渡り鴉と言うくらいだから、渡り鳥なのね。

「だったら全部渡ってからゆっくり行けばいいだろうに」

「仰ることはごもっともなのですが、成人の儀に間に合わせねばならないのです」

「なるほどな」

ユーノの説明に頷いたハーマンは、私のほうを向いた。

「キーネ、空を飛んでみたいって言ってたよな？」

「え？ うん。飛べたら気持ちよさそうだと思うもの」

「ちょっと上から見ているか？」

ハーヌは小島を顎で示す。

「よろしいのですか？」

ユーノが嬉しそうに尋ねる。

「キーネ次第だな」

答えたハーヌに、私は大きく頷いた。

「行く。私、飛んでみたい」

小島・1

ハーヌの背に乗って飛んだ感覚は、一言でいえば「最高！」だった。

天気は上々、公害のない空と海は青く光っている。風は吹き付けてくるけれど寒くはなくて、むしろ気持ちがいい。

ハーヌの首の付け根に座り、手でたてがみを掴む。飛び立つ前に確認のためぎゅっと引っ張ってみたけれど、私の力くらいでは痛くないそうだ。

「ハーヌ！　すごく気持ちがいいねっ」

風に飛ばされないように大きな声で言うのと、長い首をくると曲げてこちらを向いたハーヌが笑った。顔自体が大きいのと竜なのでわかりにくいけれど、楽しそうな表情をしている気がする。

「それはよかった。じゃあもう少し高く飛ぶぞ」

「うんっ」

答えた途端に、ぐっと高度があがる。ぽかりと浮かんだ雲が横に見えた。

「うわっ」

小さな叫びと共に、背負ったリュックが肩に食い込んだ。ユーノがしがみついたらしい。

ハーヌの背中に乗るときにユーノとどちらが前になるかモメた挙句、結局私が前になった。私は別にユーノの後でも構わなかったのだが、ユーノは自分が前になってハーヌを乗りこなす自信はないと言いきった。別に乗りこなすというほどのことではないんだけど。

私は前でも構わないけれど、ただ直接身体に抱きつかれるのは嫌だったので、ユーノが私のリュックに掴まることになった。いくらイケメンでも、いや、イケメンだからこそ、密着されるのは嫌だ。ユーノも直接私に掴まることにならなくてほっとしたらしい。さすが王子さまは品行方正だ。

結果的に私が前なのは正解だったと思う。とにかく視界が広い。ハーヌが上昇すると雲がぐんと近づいて、一瞬視野を白い霞みが覆い、そしてぱあっと青空が広がる。下降に転じるときらきら輝く海面が大きく広がる。次に見えるのは滑らかな回転に伴って傾く水平線。綺麗な弧を描いて視野を過るハーヌの長い尾。後ろではこうはいかない。

「わ、わっ」

背中でユーノの声がした。相当怖がっているようだ。

無理もないと思う。服装から察するに、この世界にはまだ飛行機なんてないだろう。きっと空を飛ぶことができるなんて考えたこともなかったはずだ。それが急にこの状態では、怖くて当然だ。

頭では同情しつつ、私はハーヌに速度を落としてと頼むことはしなかった。だってこの心地よさは格別だ。吹き付ける強い風がちっぽけな悩みなど吹き飛ばしていく。どんなジェットコースターだって、この解放感には勝てない。

「大丈夫か？」

「うん。すっごく気持ちいい」

心の中でユーノにごめんと謝って、自分の気持ちだけを答える。ハーヌはまた笑ったようだった。うん、ハーヌなら万一私が落ちたとしても、きっと海面に叩きつけられる前に拾ってくれるだろう。――そう思えるからこそ、無邪気に楽しんでいられるんだってことは、私にだってわかっている。ついさっき出会ったばかりなのにね。少々手荒い空の散歩をたっぷり楽しんだ後、ようやく私たちは目的の小島に向かった。

上から見下ろすと、本当に小さな島だった。崖の上の平たくなった部分はテニスコートくらいだろうか。横から見た島は茶色い岩だったのに上から見るとほとんどが白と黒と灰色だ。

「鴉はいないようだな」

ハーンが言った。

「うん。周りにもいないよね」

「ああ」

「降りてみる？」

「お願いします」

ユーノが小さな声で答えた。

「鴉が来たら逃げるからな」

言ってハーンが高度を下げる。

降り立った島は糞の臭いが漂っていた。上から白く見えていたのは糞と孵化した後の卵の殻だったらしい。黒が羽根と羽毛。灰色なのは糞か何かで、巢の形に丸くなっている。

糞はしっかりと固まっていて、歩くと靴の下で微かに碎ける感触がした。多分糞が固まっているからこの程度の臭いで済んでいるのだろう。べたべたしていたり、歩くとびに粉塵が舞い上がるようでは歩くこともできない。

ハーンの背中から滑り降りると、ユーノは膝に手を当てて身体を支えた。

「大丈夫？」

「は、はい……」

「顔色悪いよ」

「ちょっと船酔いというか、竜酔いしたようです」

言って大きく息を吐いたユーノは、ようやく身体を起こした。

「ご心配をお掛けして申し訳ありません」

「ううん。無茶させてごめん」

青い顔を見ていると良心が疼いた。ハーンの飛行が手荒かったのは私の所為だ。

「探すのは宝石だね？ 私、その辺を見てくるから」

罪悪感から積極的に協力を申し出て、ユーノから離れて歩きだした。とはいえ、こんな糞だの卵の殻だのばかりの島にとっても宝石なんかあるとは思えな——あれ？

すぐその大きな巢の脇に、ピンポン玉くらいの真っ青なものが煌めいている。きつとサファイアか何かだろう。ガラス玉としか思えない大きさだけど、私のデコ携帯とは輝きの深さが違う。

「あった！」

声を上げて駆け寄る。いくら宝石でも糞のついた物を素手で触るのは嫌だったから、タオルハンカチで包むように拾い上げてみると、青い石は銀の指輪の一部分だった。こんなに大きな石のついた指輪なんて邪魔としか思えないけれど、高価なのは確かだ。

指輪を見せようとユーノに向かって振り向こうとしたときに、今度は目の端にピンク色の四角い物が映った。糞がべっとりついていて、半分しか見えないけれど、でも、どうみてもあれも宝石なんじゃないだろうか。

駆け寄って持ち上げると、ピンク色の宝石がいくつも嵌められた金色のブレスレットらしきものがぶら下がった。石はさっきの青いのよりも小さいけれど、石の数が多くて金色の部分にはかなり細かな細工がしてある。これも間違いなく高価なものだろう。

改めて見回すと、あちらこちらで羽毛の隙間や藁の下からちかりと光るものが顔を覗かせていた。何かの道具らしい金属片やコインがほとんどだけれど、よく見れば宝石らしいものもちらはら混ざっている。鴉は光るものが好きというのは、世界が違って同じらしい。

どれが国宝なのかはわからないまま、私は目についた物を拾うことにした。集めてからユーノに選んでもらえばいい。文字通りの宝探しは、臭いさえ我慢すればなかなか楽しかった。

タオルハンカチに小さな山ができたところでハーヌの声が掛かった。

「鴉が戻ってくる。乗れ」

「はい」

言いながら戻ろうとしたところで、私は少し離れた巢の陰に他のものよりもずっと巨大な赤い宝石を見つけた。どうして今まで気が

つかなかったのかと不思議になるほどの強い輝き。

駆け寄って間近で見ると、石の中で炎が燃えているように光が揺らめいている。こんな光り方をする宝石があるなんて、聞いたこともない。きつとこれが国宝に違いない。

「キーネさま」

ユーノの声を聞きながら、私は宝石を素手で掴んだ。手が汚れるのなんて気にしていられない。今これを持ち帰らないと、次の機会はない気がする。

ぐつと力を込めたのに、宝石はびくともしなかった。

「キーネ、早く！」

ハーヌに急かされながら、渾身の力で押すと、やっと宝石がぐらりと揺れた。一度動いてしまえば後は早い。二度三度と揺らすと、握り拳大の宝石がぱかりと取れた。

炎のように光っているのに、手触りが冷たいのが奇妙に感じる。

「取れた！」

宝石を掴んで立ち上がり、振り向いた目に飛び込んできたのは、こちらに向かって飛んでくる黒い鳥の群れだった。

小島・2

鴉はざっと見たところ百羽くらいのように思えた。もちろん正確に数えている余裕などない。それでごく一部だと言うんだからすごい。

次第に大きくなる黒い鳥たちに向かって、ハーヌが威嚇するように炎を吹いた。ライターどころではない、巨大火炎放射器だ。鴉の群れがさつと二つに分かれて、またすぐに一つに戻る。その間もぐんぐんと距離近づく距離。――あれ、ちょ、ちょっと待って。鴉にしては随分大きいような……。

頭の片隅で考えつつ、必死に足を動かして翼伝いにハーヌに駆け上がる。走るのは得意なんだけど、慌てているのと両手で宝石を抱えているのとで足が纏れた。よろけそうになったところをユーノがぐっと引っ張ってくれる。

「あ、ありがとう」

「いえ」

短い会話をハーヌの叫びがさえぎる。

「早く掴まれ」

鴉の鳴き声と嘴をカタカタ鳴らす音に急かされるようにハーヌの首の付け根に腰を降ろしてたてがみに掴まる。すぐにユーノも座った気配がした。

「掴まったよ!」

周囲の音に負けないように大声で叫んだ途端、ヒュッと風を切る音がした。次の瞬間、目の前に迫る巨大な鴉。あちらの世界の鴉よりもずっと巨大だ。翼を広げた幅は、多分二・三メートルはあるだろう。私自身よりもずっと大きい。茫然とした目に映るのは尖った嘴と鋭い鉤爪。そして何より怖いのは、その黒い目だ。明らかに知性の宿る目に、はつきりとした怒りと攻撃の意志が表れている。

「クケェ」

耳障りな鳴き声と共に鉤爪が眼前に迫る。逃げないと、同時に、逃げられない、とも思う。硬直した私の身体が、突然ぐつと下に押しつけられ、鴉の姿が視界から消えた。

ハーヌが飛び立ったのだ、と理解するまでにわずかに時間を要した私は、耳元で叱責されて思わず問い返した。

「伏せてください」

「え？」

「伏せて」

焦れたような再度の強い声。ぐいつと背中を押されるままにハーヌの背に上体をつけた瞬間、身体のすぐ上を大きなものが通り過ぎて行った。ばさりと翼が空気を打つ音が響く。

「あ」

「そのまま伏せて、しっかりと掴まったまま両腕を身体の下に入れてください」

丁寧な口調ながらも、強く命令する声が耳元で聞こえた。

「少しきついですが、我慢してください」

指示どおりに身体を縮めると、再び耳元でユーノの声。続いて上から何か掛けられ更にリュックごと抱き締められる感触に驚いた。身動きができないながらも視線を巡らせると、ユーノが頭からマントを被って私を抱き込んだらしい。風にはためくマントを掴んだユーノの意外に大きな手が間近に見えた。

遮るものができた所為で、鴉の鳴き声がぐぐもって聞こえるようになった。それだけで恐怖が幾分和らぐ。

「こいつらしつこいから、速度を上げるぞ」

「はいっ」

ハーヌとユーノの息の合った遣り取りの直後に、ぐんと加速が増した。周囲の喧騒がだんだん遠くなる。

しばらくは身体を竦めていたものの、静かになると外の様子が気になってくる。

そっと顔を上げると、マントとユーノの手の間から水平線が見え

た。先程の騒ぎが嘘のように凧いだ海。遠くに白い帆を張った船が綺麗な航跡を描いているのが絵画のようだ。やっぱりこの世界の船は帆船なんだと、妙に納得しながら私はその姿を見送った。

「もういいぞ」

ハーヌの声がして、吹き付けていた風が緩んだ。ユーノがマントを除けて身体を起こすと、自然にほうつと溜息が零れた。

「一旦どこかに降りるか？」

「うん、お願い」

ハーヌの申し出に私はすぐに頷いた。どこかでちょっと落ち着きたい。

すぐにハーヌは高度を下げた。目の下にはまた別の小島。この海域には小島が点在しているらしい。

人影のない浜に降り立ち、とりあえず私は上着を脱いでばさばさと振った。鴉の糞がついていそうで嫌だが、洗うわけにはいかないから、せめてはたくことにしたのだ。

「怪我はないか？」

「うん、私は大丈夫。ユーノが庇ってくれたし」

言ってユーノを振り返り、私は絶句した。ユーノのマントの真ん中辺りがざっくりと二つに裂けている。

「私も怪我はありません」

ユーノは敗れたマントを持ったまま穏やかに言う。

「ユーノ、それ……」

「鴉の爪が引っ掛かったようですね。マントが厚くて助かりました」
ユーノは落ち着いた様子でマントを払うと、そのままふわりと身に付けた。

「背中、見せて」

「本当に大丈夫ですよ」

「いいから、見せて」

「はい、どうぞ」

たった今羽織ったマントを脇に寄せてユーノがあちらを向く。幸い上着の背中部分は切れていたけれど、肌に至っては届いていないようだ。

「ほら、大丈夫でしょう？」

上品に微笑むユーノはさっきまで青い顔をしていたのが嘘のようだ。

「うん。そういえば、具合が悪かったんじゃ……」

「なんだか通り越したみたいですね。二度目で慣れたんでしょうか」
おっとりとして王子様スマイルを浮かべるユーノは、最初の印象とは違って意外に図太いらしい。莫迦丁寧な口調がなくなったのは、同じ困難を潜り抜けてきた親近感からだろうか。ついでに敬語もなくていいんだけど、そう簡単には変えられないかな。

念のため、大丈夫だろうと思いつつも、ハーヌにも確認する。

「ハーヌも怪我はない？」

「ああ。鴉の攻撃は俺には効かないからな」

頷いたハーヌは、続けて厳しい声を出した。

「それより、無理はするなと言ったはずだが」

「ご、ごめんなさい」

これはもう謝るしかない。鴉を甘く見ていた。そもそもあんな大きいとは思っていなかった。いや、あちらの鴉だって、私には太刀打ちできないんだけど。

「キーネさまは、何を拾っていらしたのですか？」

取り成すようにユーノが尋ねてくれた。言われて手に握りしめていた宝石の包みのことを思い出す。

「そう、これ。ユーノが探している宝なんじゃないかと思って」

タオルハンカチを広げて、宝石を見せる。もちろんイチオシはあの炎の石だ。

「これなんか、いかにも国宝って感じでしょ」

「こ、これは……」

ユーノが驚いたように目を見開く。脈ありと見た私は勢いづいて尋ねた。

「ね、これじゃない？」

「フアフニレーンの炎……」

ユーノが呟くように言った。

「？」

「これはきつとフアフニレーンの炎と呼ばれる宝玉です。百年程前に盗難に遭い、犯人は捕まえたものの結局宝玉の行方はわからないままになっていたという、伝説の石です。私も話に聞いたことしかありませんが、中で炎が揺らめいて見える石など他に考えられませんか」

「百年前って、じゃあ……」

「ええ。残念ですが、私の探していた石とは違うものです」

「そんな……」

私は改めてタオルハンカチの上で輝いている炎の石を眺めた。夕暮れで影が長くなる中、石の中の炎はますます光を強めている気がする。これが目的の石じゃないなんて……。

諦めきれない私はユーノに一つの提案をした。

「目的の石じゃなくても、伝説の宝玉を見つけたんだから、代わりにこれで納得してもらってわけにいかないかな？」

「それは……」

ユーノが困ったように言い淀む。

「ね、駄目？」

「私が探している宝玉は、『王家の扉』と呼ばれ、国の繁栄の礎となるものなのです。たとえ伝説の宝玉でも、代わりにはなり得ません」

「そっかあ……」

残念だけど、はっきり言われたら仕方がない。意味のない無理なんかするんじゃないかった。

肩を落とした私の隣で、今度はハーヌが尋ねた。

「その『王家の扉』ってのはどんな石なんだ？」

「大きさはこれくらいです」

ユーノは両手の人差し指で直径十五センチくらいの丸を描いた。

「乳白色の石で、日頃は鈍く光っています。ですが、この石の価値はその見た目ではないのです」

「見た目ではない？」

寶石に見た目以外の価値ってあるんだろうか。

「この石は不思議な力を持っているそうです。それゆえに『王家の扉』と呼ばれているとか。私自身その力についてはまだ知らないのですが、石と共にその力を伝えられること自身が、世継ぎの証とされています」

なるほど、何か特殊な石らしいと納得した私の横で、ハーヌが意外なことを言い出した。

「その石ってのは、俺たちが通ってきた『入口』だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4460x/>

手のひらの竜

2011年11月14日03時28分発行